The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「寄せ場」に見る子育て・子育ち ： 横浜・寿地区における実践の歴史的展開を事例として
Author(s)	桑山, 碧実
Citation	教育文化学年報. 2024, 19, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「寄せ場」に見る子育て・子育ち
ー横浜・寿地区における実践の歴史的展開を事例としてー

桑山 碧実

1. はじめに

本稿では，日雇い労働者の「寄せ場」という歴史的文脈をもち，今なお社会経済的不利の集中する横浜・寿地区を事例に，子育て・子育ちにかかる実践の歴史的展開を整理することを通じて，これらの実践の特徴と今後の研究の課題を明らかにする。

横浜・寿地区（以下,「寿地区」という。）は戦後の復興期から高度経済成長期にかけて日雇い労働者の「寄せ場」(1) として発展し，大阪・釜ヶ崎（あいりん地区），東京・山谷と並んで日本の「三大寄せ場」や「三大ドヤ街」（佐久間・築地編 1972, p.2, 野本 1974, p.8, 岩田 2017, p.160, 寿歴史研究会編 2022, p.7）として知られている (2)。近年では高齢化や困窮化が進み生活保護の割合が増えて「福祉の（ニーズの高い）まち」とも呼ばれ（山本 2008, 寿歴史研究会編 2023），今なお社会経済的不利が集中する地域の一つである。こうした日雇い労働者の「寄せ場」としての文脈をもつ寿地区は，歴史的に単身男性の人口が多く，日雇労働や路上生活，アルコール依存，福祉や介護に関わる課題が可視化されやすい一方で，寿地区で生活する子どもや家族の姿や，かれらを取り巻く貧困や差別といった課題は後景化されやすい。これまで寿地区を対象とした研究は，都市問題や社会福祉，医療などの領域での研究（青木 2000, 松本 2004, 山本 2008, 林 2014 など）が蓄積されているが，これらの議論は主に成人男性をとりまく課題を対象としたものが多く，子ども・家族に焦点を当てた研究は管見の限りない。寿地区では長年にわたって複合的な困難を抱えた子どもや家族を対象とした活動が展開されてきたが，こうした実践は寿地区の歴史において光があたりづらいものである。こうした背景から，本稿では寿地区の子育て・子育ちの実践に着目し，どのように実践が行われてきたのか，資料からその歴史的展開を整理する。

本稿では，まず寿地区の成り立ちと子ども・家族の状況について概観し（2 節），次に寿地区において子育て・子育ちに関わる実践が歴史的にどのように展開されてきたのか，資料からその変遷を辿る（3 節）。これを通じて，寿地区の子育て・子育ちに関する実践の特徴と研究の今後の課題を示す（4 節）。

2. 寿地区の成り立ちと子ども・家族

寿地区は，横浜市中区の中心部―オフィス街や繁華街や元町・中華街などの有名な観光地のほど近く―に位置する，東西約 200m・南北約 300m の約 0.06 ㎢のとても小さな地区である。この小さな地区に 100 軒以上の簡易宿所が密集して立ち並んでいる。

まず，寿地区の生い立ちを簡単に振り返る。第二次世界大戦の横浜空襲によって焼け野原となった寿地区を含む埋地地区[3]は，敗戦と同時に進駐軍によって土地を接収された（青木 2000）。1957 年の接収解除後，職業安定所が寿地区に移転してきたことを契機に日雇労働者の「寄場（よりば）」が徐々に寿町に移転し，こうした日雇い労働者のための簡易宿所が作られた（佐久間・築地編 1972，青木 2000）。その後 1961 年の横浜市の都市環境整備において，横浜簡易宿泊事業協同組合（ドヤ組合）が他地域にドヤ建設の拡大を自粛する旨の上申書を提出したことにより，寿地区が日雇い労働者の「寄せ場」及び「ドヤ街」として囲い込まれ，現在の寿地区の空間構造が作られた（青木 2000）。次第に高齢化や産業構造の変化などにより労働者らは日雇い労働市場から排除されるようになり，1990 年代には日雇い労働者向けの求人が大幅に減少し，生活保護の受給者や路上生活者などの生活困窮層，外国人労働者が増加した（青木 2000，寿歴史研究会編 2023）。こうした「寄せ場」機能の縮小に伴って，寿地区の人口の多くは 65 歳以上の高齢者となるとともに大多数が生活保護を受給するように変化していった（寿歴史研究会編 2023）。2023 年調査では寿地区には 113 軒の簡易宿所があり，宿泊者人数は 5,340 人で，うち約 9 割にのぼる 4,981 人が生活保護を受給している（横浜市健康福祉局寿地区対策担当 2024）。このようにして寿地区は，他の地域では生活が困難になった人を受け止めるようになり，現在では「福祉ニーズの高いまち」として社会のセーフティーネットとしての役割を担っている（寿歴史研究会編 2023, p.201-203）。

寿地区はかつて「寄せ場」の中でも有子世帯が多かった。1968 年 12 月の調査では推定で 500 世帯子ども数千人（野本 1974）といわれ，1969 年 12 月の調査では約 500 名いた（野本 1974，横浜市健康福祉局寿地区対策担当 2024）とされる。その後の 1970 年の 9 月には 202 世帯 400 名，1973 年 12 月には 190 世帯 300 名と徐々に減少していった（野本 1974）。2012 年以降現在に至っては，簡易宿所で生活する子どもは 10 人未満とされている（横浜市健康福祉局寿地区対策担当 2024）。もっとも，これは簡易宿所の宿泊者の動態であり，簡易宿所に住む子どもが減少してからも，寿地区内の簡易宿所以外の住宅を中心に子ども・家族が生活してきた。住民基本台帳に基づく人口では，寿地区の中心エリアのみに範囲を限定したとしても，2023 年現在も少なくとも 40 名の 18 歳未満の子どもが住んでいるとみられる（横浜市 2023）。また，本稿で確認する子どもの活動に見られるように，寿地区の子どもの居場所では地区外からも困難とともに生きる子どもや家族を長年にわたって受け止めてきた。このように「寿地区の人口」としてよく参照される簡易宿所調査では捉えられていない子どもたちが地区内に存在している。

そうした子ども・家族の存在は，「寄せ場の常で，寿町は圧倒的な単身の男性社会」（青木

2000, p.63）や「高齢・単身・男性の町」（寿歴史研究会編 2023, p.202）と評される寿地区の中で不可視化されやすい。近年発刊された寿地区の歴史をまとめた書籍（寿歴史研究会編 2022, 2023）においても，子ども・家族に関しては現実の活動の実績・規模に対してかなり限定的な記述にとどまるなど，寿地区で生きる／てきた子どもや家族の姿は寿地区の公式な歴史のなかでも見えづらい存在である。次節ではこうして後景化されてきた寿地区の子育て・子育ちについて，散在する資料からその活動の歴史的展開を整理する。

3. 寿地区の子育て・子育ちに関わる活動の展開過程

本節では，これまでまとまった整理がなされてこなかった寿地区における子育て・子育ちに関わる活動について，その展開を黎明期（1960～70 年代）・定着期（1980～2000 年代）・展開期（2009 年～）・転換期（2019 年～）の 4 つの時期に分けて確認する。整理に際しては，寿地区の子育て・子育ちに関わる文献や，筆者の地域での活動[4]を通じて収集した報告書などの資料を用いる。

1）黎明期（1960～70 年代）

寿地区の子どもの活動は 1960 年代前半に始まる。この時期の子どもたちの様子や子どもに関わる活動については主に野本（1974），ことぶき学童保育協力会編（1987），田中（2005），杉本（2009），村田（2020），加藤（2022a, 2022b）の資料に記されている。当時の寿地区の子どもたちは，①数が多いこと，②不就学の子どもが多いこと，③全体に活気があったことの 3 点が特徴として挙げられている（田中 2005，加藤 2022a）。こうした中，行政の対策としては横浜市青少年相談センターの取組から発展して 1964 年 12 月に「ことぶき学級」が発足し，横浜市教育委員会から 2 名の教員が派遣されて，子どもの集団活動や補習教育などが行われた（1967 年 9 月に終了）（加藤 2022a）。

こうした行政による長期欠席・不就学児童向けの対策とは別の動きとして，青少年相談センターの職員を中心に地域の人々が連携して，1964 年から寿地区の子どもたちすべてを対象とした子ども会「ぼっこ」という組織的かつ定期的な活動が始まった（野本 1974，ことぶき学童保育協力会編 1987）。さらに，この子ども会「ぼっこ」のメンバー（中心は寿町の施設職員）がすそ野を広げ，子ども向けの自主的な活動が寿地区のあちこちで展開されるようになる。この頃の子ども向けの活動はことぶき学童保育協力会編（1987, p.57-67）に詳述されており，その内容は以下のように整理される。

この時期は住み込みによる活動形態が中心で，恵荘 4 階の 25 号室を拠点に「共同託児」（1965 年頃），「恵荘四・二五活動」（1966 年頃～），「恵荘文庫-松影図書館」（1966 年頃～）といった活動が行われ，隣り合って住む福祉施設職員や共同財政によって支えられていた。こうした恵荘の活動から派生して野球チーム「松影シャドーズ」（1967 年頃）や大学生と中学生による「中学生新聞『季節』」（1967 年頃～）の活動にも発展した。また，恵荘の活動

の後身として一軒家を借りてたまり場とした「寿子供の家」（1967 年頃）や生活館と呼ばれる町内会館（以下「生活館」という。）の 2 階で行われた「勉強会」（1967 年頃～）などもある。

こうした子ども向けの活動は 1960 年代後半に，子どもの減少や政治・社会的情勢を受けて下火になっていった中，前述の「勉強会」消滅後には別のメンバーによる「寿町勉強会」（1969 年頃）が誕生し，その後解体を経て 10 年ほど続く「あおぞら」という勉強やたまり場の活動につながった。また，日雇い労働者個人の取組である子ども向けの「鼓笛隊」（1970 年頃～），野球チームの「ジュニア・ベアーズ」（1971 年頃）といった活動も行われた。さらに，1972 年頃には子どもが 24 時間生活していける空間を地域に作る「寿共同保育」の取組が始まった。「寿共同保育」は，行政の資金に頼らず，資格などがなくても子どもを皆で育てるという活動を寿地区で行っていたという特徴があった（杉本 2009）。「寿共同保育」の初期には，教会，「あおぞら」，自治会，生活館職員，「寿共同保育」などが一緒になって，朝の「子供食堂」も行われた。その後は，おやつを一緒に作って食べる「おやつの会」（1981 年 5 月～83 年 7 月）や「柔道クラブ」（1982 年 6 月～85 年 3 月）が生活館で行われた。同時期には，共同保育から分かれた人たちによって作られたたまり場である「風車小屋」（1979 年頃～）や野球チーム「ジャガーズ」（1982 年 9 月～）などの活動も行われた。

以上のように，1960～70 年代にかけては約 20 もの活動がかわるがわる存在していた。「恵荘」や「寿共同保育」といった中心的な活動から派生・分化して様々な取組が起こり，福祉施設の職員だけでなく大学生ボランティアや子育てをする親，日雇い労働者など多様な主体が中心となって自発的な活動が行われていたことが特徴的である。

2）定着期（1980～2000 年代）

前述のように 1960～70 年代は子どもに関わる様々な活動が現れては消えるといった激しい動きがみられていたが，1980 年代にはまとまった動きとなり，その後数十年続く活動が誕生する。一つは 1983 年 8 月に生活館 3 階で始まった「ことぶき学童保育」で，その後の寿地区の子どもに関わる様々な活動は学童保育およびその職員が中心となって担っていくことになる。二つ目は，学童指導員によるボランティア活動として行われてきた「勉強会」である。三つ目は「若衆宿」と呼ばれる中学生以上を対象としたたまり場で 1984 年 5 月に地区内の市営住宅の 4 階集会室で始まった。四つ目は，1984 年 9 月に始まった不登校の子ども向けの活動「豆の木がっこう」である。この時期の子どもたちの様子や子どもに関わる活動については主にことぶき学童保育協力会編（1987），豆の木がっこう編（1990），山埜井（1987, 2009），石井（1987, 2013, 2014），石井・柳下（2011）などに記されている。これらの資料をもとに，それぞれの活動について整理していく。

①ことぶき学童保育

前述の「おやつの会」のメンバーを中心に設立準備会が進められ，1983 年 8 月に「ことぶき学童保育」が設立された。当時の子どもたちは学校に行ったり行かなかったり，行って

もクラスの友達との付き合いがなく学校に居場所が見いだせず，さらにはいじめやケンカ，万引きなどが遊びの代わりにさえなる状況にあった（ことぶき学童保育協力会編 1987）。こうした問題意識のなか，「誰もが自由に出入りできる開かれた場にする，エネルギーが発散できるような楽しい魅力ある企画の設定，協力して話し合いで決めていける関係づくり，指導員が日常的につき合い話し相手となる，等」を活動の柱にして始まった（前掲著，p17）。拠点となった生活館 3 階では，児童ホールと呼ばれる部屋での卓球やプロレスごっこなどの身体を動かす遊びや，図書室での工作，婦人子供室と呼ばれる部屋でおやつを食べるなどの活動に加えて，長期休暇にはプールやキャンプ，遠足などの外出行事も多く行われ（前掲著，p.17-36），こうした活動は 2023 年 5 月の閉所まで続いた。学童保育の活動開始 3 か月後頃には子どもと親に対するアンケートが行われ，その中から「勉強がしたい」という希望と大きい子と小さい子の力関係が難しく「いじめがある」という声が出てきたことを受け，前者を②「勉強会」で，後者を③「若衆宿」で受け止めるようになる（学童保育協力会編 1987，p.18, 38）。

②勉強会

学童保育に参加する子どもたちからの「学校の勉強がわからない。勉強を教えてほしい」（山埜井 2009, p.112）という希望により，学童保育の終了時間の後，市営住宅の 4 階集会室では学童指導員のボランティアによる子どもたちの勉強会が行われた（ことぶき学童保育協力会 1987）。勉強会は夕方 18 時すぎから深夜 12 時近くまで，1 対 1 の形式で子どもたちがかわるがわる参加していた（山埜井 1987, 2009）。そうした中で不登校の子どもや高校受験を目指す中学生，働きながら定時制に通う高校生なども参加するようになり，学習だけではなく悩みごとを語り合う場となっていった（山埜井 2009）。こうした勉強会の場は，長年にわたって子どもたちの学力・進路保障だけではなく，ケアの役割を果たしてきた。勉強会を支える指導員が学童保育を退職してからは生活館でボランティアとして 2024 年現在も継続されている。

③若衆宿

前述の年齢の異なる子どもたちの間の力関係による関係づくりの難しさを受け，「とりあえずは中学生たちの悩みを受け止め，ともに生きる場を作りたい」（石井 1987, p,41）という呼びかけから 1984 年 5 月に「若衆宿」という場づくりが始まった。石井（1987）の報告によると，学童保育終了後の夕方 18 時から 21 時頃まで，市営住宅 4 階の集会室で子ども・若者の自由な居場所を提供し，室内ではおしゃべりや裁縫，トランプなどの思い思いの過ごし方をしていた（p.41）。また，建て替え前の市営住宅の 4 階は集会室以外吹きさらしのピロティのような開けた空間になっており，子ども・若者たちは室内だけでなくそのピロティで体を動かして遊んでいた（前掲著, p.41）。当初は中学生の居場所を目的としていたが，上は 20 歳前後から，下は 1 歳児まで幅広い年齢層の子ども・若者を受け止めるなかで，子ども・若者同士の関係がつくられていった（前掲著, p.41-42）。

④豆の木がっこう

他方で，1984 年 9 月に「学校に行かない子どもたちが深く息をつける場，ありのままでいられる場」（亘理 1987, p.43）として活動が始まった。学校に行きたくなく行き場がないことに困っていた子どもが「町ん中に学校が欲しい,自由な学校が」（豆の木がっこう編 1990, p.27）と言ったことをきっかけに，生活館の学童保育の場所を借りて学童が始まる前の午前中に勉強や工作，卓球をしたり，午後は畑や温水プール，図書館に出かけるなどして活動が始まった。「町中を学びの場に」（石井・柳下 2011, p.37）と掲げ，週に一度子どもたちと色んな場所に出かけていたという。学校にいかない子どもたちをありのままに受け止め，学校以外で子どもが生きていける場を寿地区から作っていった。設立初期から活動に関わっていたメンバーがその後学童保育の指導員と並行して「豆の木がっこう」の活動を継続し，2010 年代ごろまで続いたとみられる。

以上のように，「ことぶき学童保育」は黎明期の活動を土台に，支援者がまとまって大きな動きとなったといえる。加えて，「勉強会」「若衆宿」「豆の木がっこう」といった活動は，支援者らが活動の中で子どもたちの声を丁寧に拾い上げ，その要請に応える形でボランティアによって展開されてきた。また，こうした活動が続く中で 2000 年前後からは外国につながる子どもたちも多く受け止めるようになっていった（石井 2004，山埜井 2009）。

3）展開期（2009 年～）

前項の定着期の活動は 2 名の学童指導員を中心に行われてきたが，2009 年 2 月には「ことぶき学童保育」のある生活館の 2 階に「ことぶき青少年広場」が設置されたことを契機に，寿地区育ちの若者が現場スタッフとして活躍し始める（石井・柳下 2011）。この時期の子どもたちの様子や活動については主に石井・柳下（2011），石井（2013, 2014）の資料に詳しい。「ことぶき青少年広場」は，横浜市青少年の地域活動拠点事業（中区）として開所した。中学生～20 代の若者に安心して過ごせる「居場所」を提供することを主たる目的として出発し，抱えている課題にとらわれずに誰にでも開かれたスペースを提供し，不登校や外国ルーツ，生活困窮などの背景をもつ子ども・若者だけでなく，孤立しがちな寿地区出身で子育て中の若い親にとっても重要な居場所となった（石井 2013）。さらに，寿育ちの若者を運営スタッフとして雇用して就業の機会を作るとともに，かれらが地域の下の世代の子どもたちを支える役割を担うようになった（石井・柳下 2011，石井 2013）。また，前述の「若衆宿」の活動も週 1 回土曜日に「ことぶき青少年広場」の自主事業として行われるようになった（石井 2014）。さらに，2014 年からは「ことぶき青少年広場」では寄り添い型支援事業として，小・中学生の子どもたちの学習支援と自炊支援が行われるようになった（石井 2014）。

この時期の活動では，これまで支援される側として捉えられてきた寿地区育ちの若者たちが，次の世代の子ども・若者たちに寄り添う側となって活動に携わるようになったことが特徴的であるとともに，この時期に蒔いた種がこの後の活動の継続に向けて重要になっていたといえる。

4）転換期（2019 年～）

2010 年代後半には前述の定着期の活動を数十年支えてきたベテラン職員 2 名が退職し，「ことぶき学童保育」および「ことぶき青少年広場」は新たな体制で活動を進めることとなった。前項の展開期でことぶき青少年広場のスタッフを経験してきた寿地区育ちの若者が，この時期には子どもの活動を中心的に支える立場になっていった。しかしながら，そうした中，新型コロナウイルスの流行により 2020 年からは地域や子どもの活動は大きく制約を受けるようになるなど，活動は厳しい状況が続いた。さらに，2023 年 5 月には 40 年間地区の子育て支援を支えてきた「ことぶき学童保育」が幕を閉じたこともあり，寿地区の子どもを取り巻く活動は大きく変わり転換期を迎えている。その後は，生活館 2 階の「ことぶき青少年広場」（週 5 日）や元学童職員によるボランティアでの「勉強会」（毎日），生活館 3 階での寿地区出身の保護者ボランティアによる子どもの遊び場づくりの活動（月 1 回）で子どもたちを受け止めている現状がある。こうした社会状況や体制の変化もあり，2010 年代後半以降の寿地区の子ども・子育てに関する文献資料は管見の限りない。こうしたことから，フィールドワークやインタビューなどによるデータの蓄積が求められる。

4. おわりに

本稿は，寿地区における子育て・子育ちに関する実践の展開を，4 つの時期に分けて整理した。黎明期（1960～70 年代）では約 20 の活動がかわるがわる現れる中で幅広い活動が模索され，定着期（1980～2000 年代）では「ことぶき学童保育」を中心として，生活館や市営住宅を中心とした主要な活動が長期にわたって行われた。展開期（2009 年～）では定着期の活動からさらに幅を広げて「ことぶき学童保育」では受け止めきれない子ども・若者を「ことぶき青少年広場」という居場所で受け止め，学習や自炊の支援も展開されるようになった。また，この時期に寿育ちの若者たちが支援する側として活躍し始めたことも重要な出来事であった。転換期（2019 年～）では，体制の変化やコロナ禍によって環境が大きく変わり，子ども支援に関わる地域資源が減るなかで「ことぶき青少年広場」やボランティアを中心に子どもたちを受け止める状況になっていった。

こうした整理を通じて明らかになった寿地区の実践は以下の点において特徴的である。一つには，施設職員による活動を中心としながらも，その支援の枠組みを超えたボランティア的な取組によって活動の幅が大きく広がっており，トップダウンではなく支援者・住民によるボトムアップで取組が作り上げられてきたことがいえる。次に，そうした実践は子どもとの日常的かつ密接な関わりの中から子どもの声を掬い上げ，それに応える形で実現されており，子どもの意見が反映される場づくりが意識されていた。さらに，寿地区で育った若者たちが，キャンプやイベントなどの準備，居場所のスタッフなどを経験する中で徐々に活動の運営側に関わり，ベテラン支援者の引退後には子どもを支える活動の中心を担う存在になってきたことは注目すべきことであろう。

本稿の文献調査を通じて得られた，寿地区の子育て・子育ちにかかる今後の研究の課題を示したい。第一に，子ども・家族の当事者の視点の不足が挙げられる。得られた資料は基本的に支援者の視点から記録されたものであるという性質上，「どのように支援をしてきたか」という視点になりやすく，寿地区で生活する子ども・家族から見た生活世界については十分に明らかにされてきていないといった非対称的な状況にあることが明らかになった。寿地区の子ども・家族は，これまで支援者の視点から「語られる」状況にあり，当事者の語りは不可視化されてきたといえる。こうしたことから，今後の研究においては当事者の視点からも寿地区の子育て・子育ちを明らかにすることが求められる。

次に，子育てや親を対象とした支援への着目の重要性が挙げられる。寿地区の子どもに関わる実践は，全体を通じて子ども・若者を対象としたものがその中心であり，子育てや親の支援を中心に据えた活動は 1960～70 年代の「共同託児」や「寿共同保育」に限定されてきたことが明らかになった。寿地区の家族や子育ての様子については野本（1974）や村田（2020）の資料に見られるが，これらは 1960～70 年代ごろの様子を描いたものであり，それ以降の家族や子育ての内実を明らかにした資料はほとんどみられない。より近年の活動においては，子育て支援を中心に据えていなくとも，若者の居場所が孤立しやすい地区育ちの親を支える役割を担ってきたことも資料からうかがえたが，こうした時期における家族・子育ての状況はこれまで明らかにされてこなかった。地区につながりのある親は，若年妊娠の経験やひとり親で子育てを遂行することも少なくない状況もあることを踏まえ，寿地区の子どもをとりまく状況を理解する上では，子どもだけに注目するのではなく地区で育った親の経験にも目を向けて，家族・子育てへの理解を深めることが今後の研究において重要である。

最後に，得られた資料からは寿地区内の団体における取組の様子などについては知ることができたが，学校や園，他の機関との関わりの内実などについては限定的でほとんど明らかにされてこなかった。寿地区では，子どもを支える地域の資源が減る中，どのようにして地域内外の他主体と協働し，子ども・家族を支えていくかが課題である。こうしたことからも，地域の支援者がこれまでどのように他の機関と協働して子どもに関わる課題を乗り越えようとしてきたのかについて，インタビューなどを通じて今後検討することが期待される。この点においては，同じく「寄せ場」の文脈を有する大阪・西成地域で長年蓄積されてきた官民の多様な主体の協働による子育て支援の実践にも目を配りながら，寿地区の地域における協働のあり様を明らかにしていくことが重要になるだろう。

寿地区はその時代の要請に応える形で周縁化された人々を受け止めてきた。寿地区は社会の問題の縮図であるとよく言われるが，それは大人（特に成人男性）の問題に限ったことではなく，子ども・若者や家族においても同様に長期欠席や不就学，差別，非行，不登校，障害，国際移住など社会の状況を反映し，困難を生きる子ども・若者や家族を地域の活動で支えていた。「寄せ場」という歴史的文脈を持ち社会経済的な不利が集中する地域から子育て・子育ちの実践を明らかにすることは，貧困や社会的排除といった日本社会の問題を逆照射するとともに，他の困難な状況にある子どもたちの生活を理解することにもつながると期待される。

〈注〉

（1）「寄せ場」とは,「日雇労働者が手配師や人夫出しから日雇仕事を斡旋されて労働現場に送り出される場所」（青木 2000, p.29）のことをいう。

（2）大阪・釜ヶ崎，東京・山谷，横浜・寿地区に加えて，名古屋・笹島を入れて「4 大寄せ場」という場合もある（青木 2000, p.29）。

（3）寿地区のある場所はかつて入海・沼であり，幕末の横浜港開港による貿易の急増に際して 1873 年に埋め立てが完了した（佐久間・築地編 1972, 青木 2000）。埋地地区とは，寿町，松影町，不老町，万代町，翁町，扇町，吉浜町の埋地七町のことを指す（佐久間・築地編 1972）。

（4）筆者は 2015 年より寿地区の子どもの活動にボランティアやスタッフの立場で関わってきた。そうした地域との関わりの中で，活動に携わる人びとや地区で子ども期や子育て期を過ごした人びとから地域の活動について直接見聞きするとともに，関連する資料を収集・保管してきた。

〈引用文献〉

青木秀男, 2000, 『現代日本の都市下層—寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。

林真人, 2014, 『ホームレスと都市空間—収奪と異化，社会運動，資本—国家』明石書店。

石井淳一, 1987, 「若衆宿から」ことぶき学童保育協力会編, 『ことぶき学童保育実践報告集』ことぶき学童保育協力会, pp.41-42.

————, 2004, 「人間は生きものだから」子どもとゆく編集部編, 『子どもとゆく—なにより大切なのは子どもが元気で楽しくいること』コモンズ, pp. 77-95.

————, 2013, 『ことぶき青少年広場宣言』ことぶき青少年広場運営委員会。

————, 2014, 「寿地区子ども・青少年に関する活動（相関図）v4」ことぶき学童保育。

石井淳一・柳下換, 2011, 「社会との関係の中で育つ子どもたち」柳下換・高橋寛人編,『居場所づくりの原動力—子ども・若者と生きる，つくる，考える』松籟社, pp. 33-73.

岩田正美, 2017, 『貧困の戦後史—貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房。

加藤彰彦, 2022a, 「中民生安定所と青少年相談センターの設立」寿歴史研究会編, 『横浜寿町—地域活動の社会史 上』社会評論社, pp. 76-83.

————, 2022b, 「寿生活館開館とセツルメント運動」寿歴史研究会編, 『横浜寿町—地域活動の社会史 上』社会評論社, pp. 84-93.

ことぶき学童保育協力会編, 1987, 『ことぶき学童保育実践報告集』ことぶき学童保育協力会。

寿歴史研究会編, 2022, 『横浜寿町—地域活動の社会史〈上〉』社会評論社。

————, 2023, 『横浜寿町—地域活動の社会史〈下〉』社会評論社。

豆の木がっこう編, 1990,『見てて！だけど手伝っちゃダメだよ！—亘理あきと豆の木がっこう 亘理あき遺稿集・追悼集・豆の木からのたより総集編』豆の木がっこうを育てる会。

松本一郎, 2004, 「寿町における医療・福祉の問題」田中俊夫・鈴木伸・松本一郎編, 『寿町ドヤ街 第 1 号 寿町の地域医療と福祉』ことぶき共同診療所寿町関係資料室, pp. 24-52.
村田由夫, 2020, 『寿で暮らす人々あれこれ』社会福祉法人神奈川県匡済会。
野本三吉, 1974, 『裸足の原始人たち—寿地区の子ども』田畑書店。
佐久間健生・築地喜代司編, 1972, 『寿のまち』横浜市中区役所市民課。
杉本貴美子, 2009, 「私と寿」松本一郎・矢島雅子・久保木泉・佐藤木綿子編, 『寿町ドヤ街 第 6 号 寿町の歴史・運動・思い出』ことぶき共同診療所寿町関係資料室, pp. 109-110.
田中俊夫, 2005, 「寿町の子供に関する活動の歴史」松本一郎・矢島雅子・久保木泉編,『寿町ドヤ街 第 2 号 寿町における歴史的記録』ことぶき共同診療所寿町関係資料室, pp. 38-57.
亘理良子, 1987, 「豆の木がっこう」ことぶき学童保育協力会編, 『ことぶき学童保育実践報告集』ことぶき学童保育協力会, pp.43-44.
山本薫子, 2008, 『横浜・寿町と外国人—グローバル化する大都市インナーエリア』福村出版。
山埜井聖一, 1987, 「勉強会」ことぶき学童保育協力会編,『ことぶき学童保育実践報告集』ことぶき学童保育協力会, pp.37-38.
————, 2009, 「ことぶき学童保育にかかわって」松本一郎・矢島雅子・久保木泉・佐藤木綿子編, 『寿町ドヤ街 第 6 号 寿町の歴史・運動・思い出』ことぶき共同診療所寿町関係資料室, pp. 111-112.
横浜市, 2023, 『令和 5（2023）年　町丁別の年齢別人口（住民基本台帳による）』, https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/tokei-chosa/portal/jinko/chocho/nenrei/r5cho-nen.html（2024/1/23 アクセス可）。
横浜市健康福祉局寿地区対策担当, 2024, 『令和 5 年 11 月実施　Ⅰ寿地区社会調査　Ⅱ寿地区簡易宿泊所調査（結果速報）』同担当。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP23KJ1513 の助成を受けたものです。